

はじめに

フッサール現象学の考察は、「事象そのものへ」をモットーとし、必当的明証を出発点に、十全的明証を目指して、主観性による構成の「何(Was)」と「如何に(Wie)」の解明を課題とする作業哲学をその特性としています。しかし、この全体的な特徴づけは、これまでフッサール以降、展開されてきた現象学研究の営みにおいて、それぞれの現象学者によってかならずしも現象学研究の共通の基盤であるとはいえない、というのが現状のようです。

そのなかで、メルロ＝ポンティは、「身体の実存」の現象学を展開し、「間身体性(intercorporéité)」を基軸として示すことで、フッサールの間主観性の現象学の基礎原理である「受動的綜合の基本形式としての対化(Paarung)」¹という観点にもっとも近似しているといえるでしょう。ところが、『知覚の現象学』から『見えるものと見えざるもの』の歩みのなかで、フッサールの「受動的綜合」の現象学的分析そのものに言及するメルロ＝ポンティのテキストは見られず、むしろ「意識の現象学(フッサール)」から「存在の現象学(ハイデガー)」への方向づけが明確になっているようにみえます。他方、『見えるものと見えざるもの』のテキストでは、フッサールの「生活世界(Lebenswelt)」の概念がたびたび言及されるだけでなく、メルロ＝ポンティの感覚をめぐる「感性世界(monde esthétique)」が強調され、これによって、内容的にフッサールの超越論的感性論(論理学)の研究領域(『受動的綜合の分析』及び『経験と判断』の研究領域)の確定に接近していることは、注目すべきことといえるでしょう。

また、とくに興味深いのは、時間論の観点からして、『見えるものと見えざるもの』において「世界の肉と身体の内」をめぐる、「過去と現在の同時性こそ、肉に他ならない」(邦訳、444頁参照)という表現がみられることです。したがってこの論稿では、主にこの論点を、フッサールの「生き生きした現在」の時間論における、「過去」の契機として過去地平に沈澱している潜在的志向性と、「現在」の印象とのあいだの相互覚起(wechselseitige Weckung)による「同時性(Simultaneität)」の成立との対比的考察にもたらしめたいと思います。それをとおして最後に、これからの現象学研究のみならず、哲学一般に要求される学際的哲学の要請に現象学がどう答えることができるか、その方向性を明らかにしてみようと思います。

1. メルロ＝ポンティ『知覚の現象学』における時間論の展開

1) 『内的時間意識の現象学』における過去把持の理解をめぐって

フッサールの過去把持の概念は、受動的綜合の分析の主題である「連合」と「触発」の概念が解明されるさいの鍵概念とされています。それは第一に、過去把持が統握(作用)(Auffassungs(akt))と統握内容(Auffassungsinhalt)という『Ideen I』で、ノエシス・ノエマの相関関係として定式化されている認識図式では理解できない、特有な志向性(後に「受動的志向性」とされる)によって特性づけられるからです。通常的作用志向性のように、自我極に発する自我の能作を含まない受動的志向性としての過去把持の領域が確定されました。そして第二に、過去把持の交差志向性(Querintentionalität)における「時間内容」の生成のさい、「印象と過去把持のあいだ、および同時に、その過去把持とその過去把持の過去把持というように、幾重にも相乗的に変化する過去把持とのあいだの時間内容の〔自己〕合致(Deckung)」が呈示されているからです。後に、この時間内容の合致は超越論的規則性としての連合(Assoziation)の規則性における覚起(Weckung)として分析され、解明されることになりました。

では、ここでメルロ＝ポンティが、『知覚の現象学』において、フッサールの『内的時間意識の現象学』の記述内容をどのように理解していたか、まずは、過去把持の概念をめぐって明らかにしてみましょう。

まず、第三部 II の時間性が主題とされる箇所、とりわけ、17 節以降のフッサール時間論に対する言及にあたってメルロ＝ポンティは、過去把持と未来予持について、両志向性は「中心的なく私」に発するのではなく、ある意味で私の知覚野そのものに発するので

¹ E. フッサール『デカルト的省察』第五一節を参照。

あり、この知覚野は、その過去把持の地平を背後に引きずり、その未来予持において未来を掴もうとする」(邦訳『知覚の現象学 2』315 頁参照)として、過去把持と未来予持の特有な志向性のあり方を的確に捉えています。そして興味深いのは、メルロ＝ポンティが過去把持を「作動的志向性(fungierende Intentionalität)」として、すなわち作用志向性そのものを可能にする志向性と性格づけ、しかもそれをハイデガーの概念としての「超越(Transzendenz)」と名づけていることです。「私の現在は、隣接する過去と未来へとそれ自身を乗り越えていき、過去と未来そのものにおけるそれらの存在するところで、それらに触れる」(同上、318 頁参照)というのです。となると次に問われるのは、当然、この「超越」といわれる、「現在がそれ自身を過去と未来に乗り越える」その乗り越え方の「如何に(Wie)」ということになりますが、この 19 節では、それに直接、触れられることはありません。とはいえ、注目に値することとして、この「過去と未来そのものが、射映をとおして自己表示される」その仕方に関して、フッサールの「受動的綜合」の概念に言及していることです(同上、参照)。もっとも、そのさいこの概念が指摘されるだけで、その内実に触れられることはありません。

19 節では、17 節で呈示されたフッサールの時間図式の全体的性格づけが問題にされます。そのさい特徴的なのは、ハイデガーの「脱自(Extase)」の概念が援用され、「時間とは、自己自身からの逃避に他ならず、この遠心的な運動の統一的な規則、あるいはハイデガーのいうように「脱-自」に他ならない。」(同上、319 頁参照)としていることです。この時間の遠心的運動は「移行綜合(Übergangssynthesis)」とも名づけられ、「未来的なものの現時的なものへの移行」をこの「脱自」にそくして、「[未来に位置する]C が長い濃縮作用をへて、最終的に熟成した集中に位置することになり、… たえずC の射映の幅は狭まり、有体的(leibhaftig)であることに近接することになる。C が現在にいたったとき、それは現在へとそれ自身でその生成(Genesis)を導き入れ、… その後に来るものの次の現在をも導き入れることになる」(同上、320 頁参照)とされます。ここでみられるのは、時間の脱自を「未来の現在への移行」の観点から記述することであり、この観点は、ここで引用されるハイデガーのテキスト:「時間性は過去に成り行く-現在化する未来として時間化する」に明確に表現されています。さらに、「隣接するC とD は、「相互内属的(ineinander)」に移行していくのであり、そして、C がD になるのは、現時的なものとしてのD の、そしてその過去への固有な移行の先取りに他ならないからである。… それぞれの現在は、追いやられた全過去の現在性の再確認であり、全未来の先取りである。すなわち現在は、本質的にそれ自身のうちに閉ざされているのではなく、未来と過去に向けてそれ自身を超越するのである」(同上、321 頁参照)として、「超越」という視点から記述されています。とすれば、ここでさらに問われるのは、全過去が現在性において再確認されるその仕方であり、また全未来が現在性を先取りするその仕方ということになります。

2) 時間の自己触発とは何か

フッサールの『内的時間意識の現象学』における絶対的時間流の自己構成の議論は、過去把持の交差志向性(Querintentionalität)と延長志向性(Längsintentionalität)という二重の志向性による自己構成として記述されています。交差志向性における時間内容の成立が同時に、内的に客観化されることで、今の連続としての延長志向性が意識にもたらされるとされます。

メルロ＝ポンティは、『知覚の現象学』における「時間の自己触発」の議論にさいして、「時間は、「自己による自己の触発」である。触発するのは、未来に向けて切迫し、移行することとしての時間であり、触発されるのは、現在の展開された系列としての時間であり、触発するものと触発されるものは、一つの同一のものなのである。なぜなら、時間の切迫とは、現在から現在への移行に他ならないからである。この脱-自は、… 主観性である。根源的時間流は、フッサールが言うには、「自己現出であるだけでなく、必然的に自己現出」であるのでなければならないのであり、そうでなければ、その流れが意識されるために、さらに別の流れを仮定しなければならないことになる」(同上、329 頁参照)と述べています。

この記述で読み取ることができるのは、メルロ＝ポンティが、この時間の自己触発をめぐる議論において、ハイデガーの「脱自」による未来に向けた時間化の見解と、フッサールの根源的時間流の自己現出の記述とを、ひとまず同次元の議論と理解していることです。しかし、フッサールが自己現出という自己構成を説明するために第二の流れを想定する必要がないと言うのは、彼がただ単に無限遡及の問題を指摘することで「必然的に自己現出である」と主張しているだけでなく、まさに過去把持の二重の志向性をとおして、その自己現出の仕方である、その「如何に」を記述にもたらしていることが見失われてはなりません。それに対してメルロ＝ポンティは、このフッサールの記述そのものに取り組むことはなく、むしろ、ハイデガーの脱自における議論にそくして、時間とは「自

己を知っている時間であるのであり、現在から未来への炸裂と裂開は、それ自体、自己の自己への関係の原型であり、内面性ないし自己性の予描一般である。ここに光が起こり、私たちがここでかかわっているのは、それ自体で休らっている存在者ではなく、その全体の本質存在がく見せる>ということにあるような存在者なのである」（同上、329頁及び次頁参照）と述べています。明かにハイデガーの「自己性と意味と理性」に結びついた実存の観点からする時間の自己触発についての記述となっています。

ということは、触発することと触発されたものが一つのことであるとされる時間の自己触発は、ハイデガーの「自己性と意味と理性」という全体的実存との関連において規定されているとはいえても、その自己触発の仕方そのものは、それ以上に現象学的分析にもたらされてはいないとされなければなりません。というのも、これに対してフッサールの触発の概念は、受動的総合の分析にあたって、連合と並ぶ重要な概念として、まさに時間の自己触発の「如何に」の解明として、無意識の過去地平における潜在的志向性のもつ触発力そのもの「増強と抑圧」の現象として詳細な現象学的な志向分析にもたらされていると言えるからです。

2. 過去と現在の同時性としての肉

『知覚の現象学』の出版から、ほぼ15年後、未刊に留まった『見えるものと見えざるもの』において、メルロ＝ポンティの肉の概念とフッサールの受動的総合との関連を適確に示しうる文章：「そうなる過去と現在とが *ineinander*（相互のうち）にあり、それぞれ包み包まれるものとなる——そしてこれこそまさしく肉なのだ」（邦訳444頁）という文章が認められます。この文章の内実を迫るために、『見えるものと見えざるもの』の中の「研究ノート」：「毀（こぼ）たれざる」過去と志向的分析——ならびに存在論」（邦訳400頁～406頁）という論稿の重要な箇所を選んで、以下 a), b), c) … と区切って呈示し、その読解を試みます。

「a) 毀たれざる」ものとしての、… 建築術的な過去なるものが存する。… b) 志向的分析論は、絶対的観想の場所を暗黙のうちに前提している、… これは、諸意義に関する「意識」の秩序であり、そしてこの秩序においては過去-現在の「同時性」なるものは存在しない、存在するのは、過去と現在との隔たりの明証性である… c) これに反して、フッサールが記述し主題化している

Ablaufphänomen（経過の現象）は、それ自体のうちに、まったく別のものを含んでいる。すなわちそれは「同時性」、「移行」、*nunc stans*（立ち留まる今）を、そして過去の守護者としてのブルーストの身体性を「意識」の「諸展望」に還元されぬ超越の「存在」に浸っているという事態を含んでいる… d) この次元的存在、世界、「存在」にあつては、過去は、限られた意味での現在と「同時的」なのである。この相互的な志向的回付〔*Verweis*〕は、志向的分析論の限界を、つまりそれが超越性の哲学となる点を、印しづけている。… e) それというのも、… *Bewusstsein von*〔すなわち〕過去を知覚したことがあるということこそ、実質的な「存在」（*Être masif*）としての過去によって担われているのである。私が過去を知覚したのは、まさに過去があったからにはかならない。f) フッサールの分析の全体は、意識の ϕ （哲学）がそれに強いるところの諸作用という枠組みによって、がんじがらめにされているのである。存在に内的な志向性たる *fungierende*（作動的・実行的）もしくは潜在的な志向性を、改めて捉え直し発展させねばならない。… この *Ablaufphänomen* が図式的に表現するところの渦巻、空間化的-時間化的渦巻（これは肉であつて、ノエマに直面する意識ではない）をこそ、根本的なものと見なされなければならない」（邦訳400頁～402頁参照）。以下、この文章の内容をめぐり、読解を進めます。

1) 『見えるものと見えざるもの』における過去把持の把握

まずは、先の引用 b) でいわれている「過去-現在」の「同時性」をめぐって、メルロ＝ポンティが、『見えるものと見えざるもの』の他の個所で、原体験の意識としての過去把持について述べている文章を取り上げてみます。「印象的意識、*Urerlebnis* とは何か。… この *Urerlebnis* を「意識する」ということは、… 合致、融合ではないし、また（フッサールはこう述べたのだが）作用もしくは *Auffassung* でもない、… それは知覚-非知覚、つまり現に働きつつあつて〔*fungierend*〕主題化されない意味なのだ（これは実は、過去把持を基本的と見なすとき、フッサールが言わんと欲していることなのである。… 意識すること＝地の上の図をもつこと——これ以上に遡行するとはできない」とする文章です（邦訳311頁及び次頁を参照）。

① このテキストではっきり読み取れるのは、すでに『知覚の現象学』で明確に述べられているように、過去把持は、作用志向性ではなく、「作動的志向性」として理解されねばならないことです。にもかかわらず、先に引用された文章の f) のように「フッサール

的分析」が「諸作用という枠組みで感じがらめにされている」、また「存在に内的な志向性たる *fungierende* (作動的・実行的) もしくは潜在的な志向性を、改めて捉え直し発展させねばならない」といった指摘は、メルロ＝ポンティの過去把持の志向性についての矛盾する理解に由来すると言われねばならないでしょう。

② 過去把持は、メルロ＝ポンティのいうように、「作動的志向性」、「潜在的志向性」として性格づけられますが、いずれも志向性ですので、当然ながら「志向分析」の課題とされます。メルロ＝ポンティが『知覚の現象学』において、『形式的論理学と超越論的論理学』における用語としてののみ指摘していた「受動的綜合」の概念は、フッサールの『受動的綜合の分析』において、過去把持の沈澱の過程が、志向の充実による直観性の鮮度の漸次的減退の過程として、また印象と過去把持の潜在的志向性の意味内容との相互の覚起 (*wechselseitige Weckung*) による「連合 (*Assoziation*)」によって詳細に記述されています。しかも、この連合という受動的綜合は、あらゆる個別的感覚野内に働く潜在的志向性の地平構造としてのみならず、異なった感覚野間に働く身体全体に伝播する地平構造を成立させていると言えるのです。

2) 「過去と現在の同時性としての肉」への接近

上記の引用 c) 及び d) による「なぜなら、志向的分析論は、メタ-志向的であるかか「同時性」にまで高まることができぬ (フッサール) … 志向的分析論は、… 諸意義に関する「意識」の秩序であり、そしてこの秩序においては過去-現在の「同時性」なるものは存在しない、存在するのは、過去と現在との隔たりの明証性である—」という箇所を出発点にして、メルロ＝ポンティの考える志向分析を批判的に考察してみましょう。

① フッサールの志向的分析論が「過去と現在の同時性」を含有できないとするメルロ＝ポンティの見解に対して、まずは30年代の「生き生きした現在」の時間流の志向分析において、まさにこの「過去と現在の同時性」が、ハイデガーの「超越」と「存在」の概念に依拠することなく、現象学的明証性において解明されていることを指摘することができます。

フッサールは、1931年のテキストで、過去把持されていく経過を「透視的現出」と表現し、そのつど過去把持されていく時間内容が次第に隠れていき、見分けがつかなくなることに同時に、なおそれらが透けて見えている様子を表現できるとしています。「完全な闇に至ったもの、まさに透視的現出にもはやもたらされないものは、現象の内部にはないことになろう。しかし、いったいこれは、何なのだろうか。私たちがここにもつのは、ある時間野、すなわち、今において同時に (*simultan*) 存在する過去の絶えず発展する形成である。そして、この[時間]野において、遠隔連合、対化、形態配置 (*Konfiguration*) が働いている。— “無意識” において、ないし、“意識” から無意識なものに向けてである²、というのです。

② 前後関係の説明のないままこの文章に接する人は、「今において同時に存在する過去の絶えず発展する形成」とは一体なんのことかと戸惑うと思われます。しかし『受動的綜合の分析』を経ることで、「現在において同時に与えられている過去の形成」という記述の明証性は明確なものになります。まずは、この『受動的綜合の分析』に至る経過として、すでに1917/18年に執筆された『ベルナウ時間草稿』において、根源的時間流が、「原感性の流れ」として規定され、そのさい初めて「受動的志向性 (*passive Intentionalität*)」が用語として使用され、その受動的志向性においては、作用志向性において働いている自我の能作がまったく働いていないと規定されました。20年代において、自我極の生成以前に受動的志向性としても作動しうる「モナド」概念が導入され、メルロ＝ポンティにおいて指摘されている、反省哲学では定題化できないとされる「現存する世界の発生と反省的理念化の発生という二重の問題」(同上、78頁)に正面から取り組む「発生的現象学」(その主要課題は、「時間と連合と原創設 (*Urstiftung*)」)が豊かに展開されていくこととなります。

③ このような問題史的背景のもと、ここで「時間野における遠隔連合、対化、形態配置」といわれる諸概念は、すべてその発生の起源を受動的綜合にもっていることが示されます。そしてこのとき注意せねばならないのは、ここでの連合の概念は、ヒュームの言う「印象のコピーとしての観念の観念連合」の連合を意味しないことです。メルロ＝ポンティは、正当にも、『知覚の現象学』の序論において、ヒュームの「観念連合」を適確に批判し、経験論的感覚主義を退けます。メルロ＝ポンティは、「印象は他の印象を喚

² E. フッサール, 『フッサール資料集 *Husserliana Materialien*』第8巻, S.87.

起する力をもちあわせていない」³、「事実的な過去は、連合の機構をとおして現在の知覚に転用されるわけではなく、現在の意識によって展開にもたらされるのでなければならない」⁴とし、ヒュームにそくした連合概念を批判し、知覚野の「志向的契機」⁵の地平構造と「図と地の変換」をモデルにするゲシュタルト概念を知覚論の中軸にすえます。

④ フッサールにおける連合の概念は、受動的志向性の能作として理解されています。ヒュームの連合概念が、フッサールにとって「自然主義的に歪曲されている」ことについては、『デカルト的省察』で言及されている⁶だけでなく、自然主義的-経験論的認識図式は、志向分析をとおして、すなわちそれ自体、意識にのぼることのない受動的志向性による受動的総合と、自我の能作を含む能動的志向性による能動的総合とによって、原理的批判をとおして徹底的に克服されています。それだけでなく、『受動的総合の分析』で指摘される「無意識の現象学」の領野において、自然主義化されているフロイト流の連合概念や、無意識の脳内活動としての連合原理を活用する脳神経科学上の「連結主義(conexionism)」は、神経現象学を提唱するF. ヴァレラのいうように、「現象学的還元」による「現在意識」の現象学的解明をとおして、再度、根底から現象学的に基礎づけられなければならないのです。

⑤ フッサールにおいて連合は、相互覚起と規定されています。フッサールは、すでに『内的時間意識の現象学』において、そのつど形成される時間内容を二側面から考察し、一方を印象と過去把持における「感覚本質の類似性による合致をとおして成立する時間内容」と、他方で印象と過去把持における「知覚対象としての事物の同一性による合致をとおして成立する時間内容」とに区別しています。つまり、過去把持の交差志向性における時間内容の合致(後の連合)が、**感覚**の感覚質の意味内容と対象**知覚**の意味内容の持続と変化に区別されているのです。さらに発生的現象学の領域において、発達心理学において「無様式知覚」と規定される、内部感覚と外部感覚が区別されない原共感覚野からの個別的感覚野の生成が、現象学的分析にもたらされ得ます⁷。この感覚質の生成という発生的現象学の問いにおいて、受動的総合の「連合と触発」の規則性をとおして、感覚形態(Gestalt)の形成が現象学の志向分析にもたらされ、この感覚形態の過去把持による沈澱をとおして潜在的志向性としての空虚な形態(leere Gestalt)による受動的志向とその充実が、志向分析の明証性の基準とされます。形態心理学において課題とされる形態そのものの生成という視点が、発生的現象学の領域において、展開可能であるということは、メルロ＝ポンティのいう「意識すること＝地の上の図をもつこと——これ以上に遡行するとはできない」という自己限定を超えて広がりうる志向分析の方向性を示しているといえるでしょう。

⑥ 他方、自我極の形成後の能動的志向性である「知覚、記憶、随意的運動感覚、言語等」の志向的能作による能動的総合をとおして、知覚対象の表象が構成され、この事物の表象の過去把持をとおした潜在的志向性としての空虚表象(Leervorstellung)が、過去地平に潜在的に与えられることとなります。こうして、成人における現在の知覚野において、その**過去地平**が、受動的総合としての感覚の空虚な形態と能動的総合による知覚の空虚表象を内含しつつ、印象の現在に対して恒常的-同時的に**臨在している**といえるのです。

3) 匿名の間身体性(メルロ＝ポンティ)と間モナダ的時間化(フッサール)

フッサールにとって触発は本来、自我に対する触発とされます。しかし、ここで重要なのは、時間の自己触発は、当然のこととはいえませんが、フッサールにとって自我の自己触発として理解されてはならないことです。自我が触発されて、触発するものに自我が向かう(対向する *zuwenden*) ことで時間の自己触発が生起するわけではありません。フッサールの場合、時間の自己触発は、自我の能作をふくまない受動的志向性による受動的総合をとおしてすでに成立しています。このように自我の対向以前に自我に対して触発するものは、そのつどの意識生(Bewusstseinsleben)全体の関心に依じて、その一部だけが意識の直観にもたらされます。この意識生全体の関心というのは、大きく、感性にかかわる自我の能作を含まない受動的志向性(情動的コミュニケーションにかかわる本能

³ M. メルロ＝ポンティ『知覚の現象学 1』、邦訳 52 頁参照。

⁴ 同上、54 頁参照。

⁵ 同上、46 頁参照。

⁶ E. フッサール『デカルト的省察』、邦訳第三九節を参照。

⁷ この詳細については、山口一郎『感覚の記憶』第二部第2章、2011 年を参照。

や感覚や感性的感情等の志向性)に属する関心と、知性にかかわる自我の能作を含んだ能動的志向性(言語的コミュニケーションの前提になる知覚、判断、行為等の志向性)に属する関心とに大別されます。そして、この感性と知性の全体にかかわる意識生の関心の性格づけにとってもっとも重要であるのは、その間主観性(間モナド性)という特性です。「モナドとモナドの間」という意味で使われる「間モナド的(intermonadisch)」という用語は、30年代の時間論において使用されています。フッサールにとって、『内的時間意識の現象学』で定題化された「絶対的時間流の自己構成」という問いは、後期時間論においては、間モナド的時間流の「nunc stans 留まる今」の生起として現象学的分析にもたらされているのです。ということは、ここで、現象学の主要問題の一つである「他者の他者性と時間の自己触発」が、「肉と受動的綜合」に関連して、メルロ＝ポンティとフッサールにおいてどう理解されているか、問われることとなります。

① メルロ＝ポンティの他者論に関する『見えるものと見えざるもの』におけるもっとも端的な指摘は、「私は私の緑のなかに相手の緑を認知するのである。ここに他我(alter ego)の問題はない。なぜなら、見ているのは私でも彼でもないからであり、匿名の可視性が、つまり視覚一般が、われわれ二人にとともに住みついているからなのである」(邦訳 230 頁)とする匿名的身体性の指摘です。レヴィナスは、この見解に対して、「自分の身体を擦って擦ったくないのに、他人に擦られると擦りたいのはなぜか。自己の身体に住まう根本的自我性による」といったと言われています⁸。これに対するメルロ＝ポンティの解答はその場ではなかったようですが、フッサールであれば、「本能的な野生のキネステーゼ(運動感覚), wilde Kinästhesie」の働く受動的綜合による匿名の間身体性の構成層と、自我の能作を前提にする随意的な能動的キネステーゼに働く能動的間主観性の構成層との志向性の二重の構成層の発生的秩序によって次のように記述しうるでしょう。「擦る」といった随意運動は、能動的キネステーゼが原意識されることで成立する、自他の身体の違いを前提にする自我極の生成後に成立するのであり、それ以前の本能的運動のさいの野生のキネステーゼは、自他の身体の違いがつかないという意味での匿名の間身体性が生起している、とする現象学的記述です。

② この匿名の間身体性の領域において間モナド的時間化がどのように生起しているかが問われるとき、フッサールの呈示する次の衝動志向性の充実の記述は、現象学的明証性によって十分に確認されうると言えるでしょう。発生的現象学において、自我が形成されていない幼児期からの作用の自我と習慣性の発展が問われるとき、「私たちは、普遍的な衝動志向性を前提にすることが許される、あるいは、前提にせねばならないのではないのか。その衝動志向性は、あらゆる本源的な現在を、立ち留まる時間化として統一し、具体的に現在から現在へと次のような仕方でも押し流す。すなわち、すべての内容が衝動充実の内容であり、目標を前にして志向されている、そしてそのさい、あらゆる原初的な現在において超越する高次の段階の衝動が、あらゆる他の現在へと入り込み、すべてをモナドとして相互に結びつけ、その一方ですべてが相互内属的に[ineinander]含蓄されている、——志向的に、という仕方である」⁹。ここで言われている衝動充実とは、たとえば、自我の発展以前の乳幼児と、初めての授乳のさい覚醒化されてくる本能志向性に即応している母親とのあいだに、授乳衝動の志向と充実が経過していくという事例に妥当します。両モナドにとって、授乳本能が覚醒し、授乳衝動が形成され、その衝動が志向され充実されることで、そのつど、衝動充実という時間内容が成立します。ここで決定的に重要であるのは、ここで成立する時間内容は、両モナドの志向の充実として相互内属的(ineinander)にともに原創設(urstiften)されて、一つの共創される「生き生きした現在の立ち留まり」であることです。モナド間に共現在化としての共時間化が生起しているのです。

③ この共現在化する共時間化の共創される「過去と現在」の同時性は、その同時性そのもの内実に関して、30年代の草稿において次のように記述されています。「同時的一致とは、しかし、ただ内容的な融合としてのみ可能である。したがって内容的原融合は印象と直接的な原過去把持との間の、両者の同時性において生起するのであり、このことは、瞬時とその瞬時において直接的に内容的な融合に関して、絶えることなく生じていくのである」¹⁰。ここで描かれている印象の現在と原過去把持の過去の契機との同時性は、

8 このことについて、2005年に来日したB. ヴァルデンフェルスは、戦後間もない現象学会におけるメルロ＝ポンティとレヴィナスのあいだの討論の内容として、箱根における研究会にて報告していました。

9 E. フッサール『フッサール全集』第15巻、545頁。強調は筆者によります。

10 E. フッサール『フッサール資料集 Husserliana Materialien』第8巻 82頁。

時間流の根底である「生き生きした現在」における現在と過去の同時性です。生き生きした現在における過去把持の過去の契機と未来予持の未来の契機が、能動的志向性による過去と未来を基づけ、後者が前者を前提にしているように、受動的間主観性は、能動的間主観性に先行し、それを基づけています。ということは、生き生きした現在における「今と過去把持と未来予持」による「現在と過去と未来の同時性」の現象学的記述こそ、メルロ＝ポンティのいう「過去と現在の相互内属こそ肉に他ならない」（邦訳、444頁参照）とする洞察に志向分析の基礎を与えているといえるのであり、しかも、それは個別的なモナド内部の「現在と過去の同時性」ではなく、間モナドの間身体性における両モナドの、相互の「現在に入り込んで」相互の過去との同時性を、つまり両モナドの間に相互に共創された一つの「過去と現在の同時性」の生成の記述となっているのです。

④ 衝動志向性の志向と充実、受動的間主観性における匿名の間身体性の次元で生じるだけでなく、能動的間主観性における、能動的志向性の能作を前提にした、もはや匿名的ではありえない、自他の身体の違いが前提になる男女の性愛においても生じています。メルロ＝ポンティは、「身体同士の連結(*accouplement* 番うこと)、すなわち両身体の志向を唯一の*Erfüllung* (充実) に向かって合わせること、… これは、万人の与りうる、各人に与えられた唯一性の感性的世界への顧慮〔関係性〕のうちに潜んでいることなのである。垂直的な「存在」の再発見によって呈示されるがままの、見える〔世界の〕、そして踏み越しを通じて、〔同時に〕見えざる世界の、唯一性こそ、「心身関係」の問題の解決である」（邦訳、383頁参照）¹¹としています。この衝動志向の充実の場合、明らかに自他の身体の違いを前提にしていますので、この段階でもはや匿名の間身体性を語ることはできないはずですが、この段階でさえ、メルロ＝ポンティは、その匿名性について次のように語ります。この場合、「私」とは、真実のところ、誰でもない、それは匿名者である。… いっさいの客観化、命名に先立たねばならない。…もともとの「私」は、それに対してあらゆるものが、それに向かって訴え、その眼前に… 何かあるものがある(*Il y a quelque chose*)とて知られざる者なのである。それゆえ、これは否定性であり—それそのものとして、もちろん捉えられない。」(同上、405頁)つまり、男女の情愛のさいの衝動的志向性の充実、この意味での匿名性の次元で語られており、フッサールからみれば、受動的綜合による相互の衝動志向性の充実が、自他の身体の違いに先行することで、自我の能作を前提にする能動的綜合としての性愛そのものに先行して成立しているとみなされます。衝動志向性は、自我の能作を前提にしない受動的志向性であるからこそ、匿名的であり、すべての客観化に先行しており、自我の能作を前提にする作用志向性である能動的志向性として理解することはできません。このすべての客観化に先行するとする匿名性の原理的見解は、受動的綜合が能動的綜合に先行するという原理的見解としてもっとも厳密な現象学的記述に到達しているといえるでしょう。ところが、いっさいの客観化に先行する匿名的<私>は、メルロ＝ポンティにとって志向分析ではなく、「垂直的な存在の再発見」に関わるとされます。このメルロ＝ポンティの存在への方向づけをさらに明確にするために、「現存在の存在了解」をテーマとするハイデガーの存在理解そのものに向かってみなければなりません。

4) モナドの「衝迫」における時間性（ハイデガー）と間モナド的衝動志向性の時間化

ここで言うメルロ＝ポンティの「衝動志向の充実」とフッサールの「衝動志向性の充実」との共通点と差異をさらに明確にし、メルロ＝ポンティの存在概念への傾斜を理解するために、ライプニッツの「モナドの根底に働く衝迫/衝動 (*appetitus, Drang*)」を「現存在の存在了解」に重ね合わせようとするハイデガーの試みを検討してみます¹²。

① この試みの核心は、ハイデガーにとっての「超越論的論理学」の理解にあたって、ライプニッツにそくした「主語と述語の包摂関係」における思考の機能としての「同一性 (*Identität*)」の根拠を、カントの超越論的統覚の自我に求めることなく、モナドの同一化の遂行そのものにみていることです¹³。この同一化は、「エンテレケイア」ないし「実体形相」としてのモナドの規定としても

11 フッサールの衝動志向性に関する草稿についての言及が、他の個所（邦訳、375頁）でもみられます。

12 この論点について、村井則夫『解体と遡行 ハイデガーと形而上学の歴史』の97頁から127頁を参照しました。なお、*appetitus, Drang* は、村井氏によって「衝迫」と、酒井潔『ライプニッツのモナド論とその射程』では、「衝動」と訳されています。

13 同上、102頁参照。なお、ハイデガーとライプニッツの関係について、酒井潔『ライプニッツのモナド論とその射程』、第三部第七章、2013年を参照。

表現され¹⁴、この同一化にハイデガーは「現存在の原超越(Urtranszendenz)」としてのモノダの「衝迫」をみるとするのです。フッサールにとって、超越論的論理学は、超越論的感性論の別名であり、具体的には、『経験と判断』、『受動的綜合の分析』、『形式的論理学と超越論的論理学』において展開されており、そのさい中核を形成しているのは、超越論的自我の超越論的統覚以前に働く受動的志向性による受動的綜合(受動的同一化, passive Identifizierung)¹⁵です。したがって、フッサールがモノダ論的現象学を展開するとき、自我モノダから考察するのではないのに対して、ハイデガーが「現存在の存在了解」を語る時、「人間の自我モノダ」から、すべてを考察しているのではないか、つまり自我の能作をまったく含まない受動性の領域に達していないのではないかと問われてくるのです。

② この超越論的統覚以前という共通点には、実は両者のあいだの根本的差異が含まれています。フッサールにとって、衝動志向性はモノダのあいだにおいて作動する間モノダ的時間化をとおしてしか、言い換えれば、間モノダ的コミュニケーションをとおしてしか作動しません。それに対して、ハイデガーの衝迫の理解は、「衝迫とは「素質でも行為の経過でもなく、<〔何かを〕目指してあるように-自らを-あらしめること>(Sich-angelegen-sein-lassen)」である」¹⁶とされ、この"Sich-angelegen-sein-lassen"は、「自己-自身-関わること(Sich-selbst- anliegen)」として自己関係性とも表現されることを確認しておかなければなりません。

③ このハイデガーにとってのライプニッツの衝迫と時間性の関係を問うとき重要な役割を果たすのが、ハイデガーの「振動(Schwingung)」の概念であり、村井氏は「生命〔モノダ〕は内在的な自己充足の内にありながら、同時に自らを超出して外部へと開かれ、さらに自身を振り返って内在的に知を形成する、生命と知の原型である衝迫とは、こうした遠心性と求心性のあいだの運動であり、遠さと近さのあいだの振動なのである」¹⁷と論じています。さらにこの振動は、「時間の自己触発」との関連において、「時間化は、根源的な全体的時間性の自由な振動である。時間は自らを延展させ、自らを収縮する」¹⁸とされます。つまり、「生命と知の原型である衝迫」の振動が、時間の自己触発における自己の延展と収縮という、ハイデガーの本来的時間性における振動に包摂されることとなります。ハイデガーの本来的時間性そのものは、周知のように現存在の有限性に基づく、到来する自己の死に対する実存的決断をとおして生起するのであり、衝迫における時間性を語るさいにも、この基本的観点は一貫しています。

④ そしてここでとくに注目すべきは、この時間の自己触発の原点に、現存在の存在了解として、現存在の「自己性(Selbstheit)」ないし「自我性(Egoität)」としての「振動の原点」が最終根拠として考えられていることです。「振動という超越論的出来事である自我性は、モノダが「集約された世界」(mundus concentratus)と呼ばれていたのと同様に、世界の現出を中心化し、世界と私の世界として現出させる凝集点であり、振動の原点である」¹⁹とされ、しかも、この超越論的に中立的な匿名的な自我性は、「身体性へ、それゆえに性別への事実的な分散の可能性を宿して」おり、各々の「私」へと多様化し分散する。そのためこの自我性は、「汝なるものが実存し、我-汝関係が実存しうることを可能にする形而上学的な制約」でもある(同上)とされているのです。

(a)このとき、ここで問われるのは、当然、匿名的な自我性が「私」へと多様化し、分散するその仕方そのものです。フッサールの発生的現象学にそくせば、この事態は原共感覚を生きる匿名的身体性が個別的感觉野の形成による身体中心化をとおして、自他の身体の個体化のプロセスを基盤にして、自我と他我の差異が現実化することに他なりません。

(b)このとき確認されなければならないのが、モノダの衝迫の時間性と実存的決断に由来する本来的時間性との、上記引用における現存在の自我性との関連です。現存在の匿名的な「自我性」がモノダの「振動の原点」と理解される以上、モノダの時間性は、実存的決断のさいに覚醒されるといえる現存在の自我性において生起する本来的時間性に包摂されるとしてしか、理解されえません。このときこそ、フッサールにおける母子関係、および成人男女のあいだの衝動志向性の充実/不充実による間モノダ的時間化と、ハイ

¹⁴ 同上、105頁参照。

¹⁵ 受動的同一化については、山口一郎『他者経験の現象学』78頁、1985年を参照。

¹⁶ 同上。

¹⁷ 同上、108頁。

¹⁸ 同上、118頁参照。ここで引用されているハイデガーのテキストは、M. Heidegger, *Metaphysische Anfangsgründe der Logik im Ausgang von Leibniz*, GA26, S.268。

¹⁹ 同上、116頁。

デガールの本来的時間性の生起との相違が明確になります。フッサールの間モノダの時間化は、衝動の充実に目的づけられた衝動の目的論における時間化と、理論理性の相互理解と実践理性の相互理解に目的づけられた理性の目的論における時間化に区別されます。このように区別される二つの時間化は、間モノダのコミュニケーションにおいて生成しており、衝動の目的論における間モノダのコミュニケーションは、家族愛として特徴づけられ、理性の目的論における間モノダのコミュニケーションは、人格的な倫理的愛として特徴づけられます。この我汝関係としての愛という関係性は、現存在の存在了解としての配慮(Sorge)とは、「世界への開き、超越の仕方」に関して、根本的差異を示しています。配慮には、汝に全身全霊で向かい合う我汝関係としての愛の相互性と応答性が欠けているのです。自己の死に向かう配慮には、我汝関係をとおして生起する、すなわち我と汝のあいだに生起する間主観的時間性、つまり愛において人と人とを生かし合う、共創し合う時間性が欠けています。言い換えると、ハイデガーは、モノダには「内も外もない」と解釈することで²⁰、自己の死に向かう自由な実存的決断に由来する本来的時間性において、「自己の死と他者の死の差異」に含蓄されている我汝関係の汝を喪失しているのです。

(c)ハイデガーは、この現存在の自我性が「汝なるものが実存し、我-汝関係が実存しうることを可能にする形而上学的な制約」でもあるとしていますが、我汝関係としての家族愛も倫理的愛も、いかなる意味での、特定の「形而上学的制約」をもつことはありません。ハイデガーがここで考える「形而上学的制約」とは、現存在の自我性の「身体性と男女の性別への事実的分散の可能性」を意味していますが、このこと自体、現象学的にはなく、まさに形而上学的に措定されているだけで、現象学的な記述の可能性は、閉ざされたままなのです。

(d) それに対して、メルロ＝ポンティの間身体性の現象学は、『幼児の対人関係』において、フッサールの受動的綜合の根本形式とされる「対化(Paarung)」を積極的にとりあげ、「フッサールは、他人知覚は「対の現象(phénomène d'accouplement)」のようなものだと言っていました。… 他人知覚においては、私の身体と他人の身体は対にされ、言わばその二つで一つの行為をなし遂げることになるのです」²¹と論じており、また『眼と精神』では、アンドレ・マルシャンに言及し、森と画家とのあいだに生じる主客を分離しがたい、「もはや何が見、何が見られているのか、何が描き、何が描かれているのかわからなくなるほど見分けにくい能動と受動とが存在のうちにはあるのである」²²という、まさに画家と森とのあいだの主客関係に先行する我汝関係として、すなわち世界との出会いとして豊かな現象学的分析にもたらしています。これらの記述は、私たちの世界との出会いの経験の現象学的記述に他ならず、いかなる意味での形而上学的制約とも無関係であるだけでなく、それらの形而上学的規定は、むしろ事象の現象学的分析を妨害する先入見でしかありえません。

3. 学際的哲学と現象学の方向性

ここで、最後に学際的哲学と現象学の方向性をテーマにするのは、「肉と受動的綜合」の対比的考察の締めくくりとして、「過去と現在の同時性」という原理的な哲学の観点が、自然科学研究の前提とされている「客観的時間と空間の把握」とどのような関係にあるのかを明確にし、今後の学際的哲学にはたす現象学の役割を明確にするためです。

周知のように、フッサールは『ヨーロッパ諸学問の危機と超越論的現象学』において、現代文明における自然科学的世界観の支配の根源を、「生活世界の数学化」と洞察していました。この洞察の有効性は、数学化そのものの源泉が、生活世界そのもののなかに潜んでいることを示すことができたとき、はじめて立証しうることになります。これこそ生活世界が数理に先行すること、生活世界が数理を基づけ、数理は生活世界を前提にすることを現象学の明証にもたらすことに他なりません。フッサールは、これを受動的綜合と能動的綜合の関係において、生活世界に含蓄された受動的綜合が能動的綜合である数理に先行し、受動的綜合が能動的綜合を基づけ、能動的綜合は受動的綜合を前提にすることとして証示することができました。

²⁰ この論点について酒井潔『ライプニッツのモノダ論とその射程』、125頁から127頁、2013年を参照。

²¹ M. メルロ＝ポンティ「幼児の対人関係」、『眼と精神』所収、邦訳、136頁。

²² 同上、266頁。なお、メルロ＝ポンティ、プーバー、禅仏教における我汝関係について、山内一郎『文化を生きる身体』第八章、2004年を参照。

ここでF. ヴァレラによって提唱されている「神経現象学」の「現在-時間意識」の分析を学際的哲学の一例として呈示します。それは、それによって、いわゆる「客観的時間」が、「過去と現在の同時性」とされる肉の概念と、間モナダ的コミュニケーションにおける受動的総合による時間化と能動的総合としての「我それ関係」をのり越える「我汝関係」における時間化とに対して、どのような位置づけを獲得することになるのかが明らかになるからです。

1) 神経現象学の方法論

神経現象学の特徴の一つは、徹底した方法論的自覚によって貫かれており、現象学の目指す明証性の基準と、自然科学研究のもつ方法論的限定性が明確に認識されていることです。ヴァレラは、「現象学的還元」の4つの契機として「還元、直観、不変更、安定性」を挙げ²³、それぞれ、還元を「自動的な思考パターンをカッコづけし、その源泉へと反省の眼をむけること」、直観を「真理の基準となる明証性の核となる想像的変更を経た本質直観」、さらに不変更を「公共的記述による具現化をとおした不変更の確立」、最後に安定性を「現象学的還元そのものの訓練をとおして安定性を獲得すること」と説明しています。学際的哲学研究の方法論としての現象学的還元にとって、特に強調すべきは、ときとして内観主義として誤解されることに対して、また出会う世界を欠く狭隘な実存主義的傾向に対して、「公共的記述による不変更の獲得と研究共同体における現象学的還元の訓練」という原理的に公共的に開かれた側面なのです。

① 二番目の契機として指摘されている「本質直観」には、その第一段階として「事例化(Exemplifikation)」のプロセスが含まれており、そこでは可能なかぎり広範に渡る実例を、個別科学の研究成果をも含めて事例として吸収することが指針とされています。この本質直観においてすでに、諸個別科学研究への根本的な開放性が示されており、存在論的差異の措定による存在及び現存在の存在了解の確定といった存在論的現象学のもつ「形而上学的制約の措定による現象学的分析を阻む明証性概念の狭隘化」に抗して、個別的科学的研究との協働研究の方向性が示されているのです。ここで、メルロ＝ポンティが、フッサールの本質直観について、そこに含まれる超越論的事実性に起因する相対性(素朴さ)についてのフッサールの自覚とその分析の方向性を、M. シェーラーの本質直観の絶対性に対する批判をとおして高く評価していることに注意せねばなりません²⁴。自然科学研究の呈示する事実としての自然の因果的連関には、哲学的認識に潜む無意識の先入見や歴史的相対性を示唆する「実質的アプリアリ」²⁵の発見に導く萌芽が含まれているのです。まさにこのことこそ、ヴァレラが神経現象学における脳神経科学と現象学の相互補完的協働研究という方向性の内実に他なりません。現象学は脳神経科学研究の研究成果を積極的に取り込み、事象の本質の解明につなげていきます。

② さらにメルロ＝ポンティは、シェーラーの本質直観の把握を批判する一方、ハイデガーが、彼のとり「世界内存在」の把握に潜む哲学的認識の絶対的優位によって、哲学と「人間の科学」を「存在論的差異」の議論において、哲学に属する「存在論的認識」と帰納的自然科学に属する「存在的認識」とに対立させることだけに終始していることを、正面から批判しています。メルロ＝ポンティは、「フッサールの方が、<世界内存在>を究めようと欲したハイデガーよりはるかに大胆に、<哲学者の世界への内属>を認めていたということになりましょう」²⁶と論じているのです。

③ ヴァレラの「公共的記述でもとめられる不変更」と「現象学的還元の訓練とされる安定性」の指摘に共通しているのは、現象

²³ F. ヴァレラ「神経現象学」(『現代思想』2001.vol.29-12)、125頁～127頁参照。

²⁴ M.メルロ＝ポンティ『人間の科学と現象学』(『眼と精神』所収)、91頁～93頁を参照。

²⁵ 同上、94頁。メルロ＝ポンティは、ここで、フッサールが考える「心理学的認識」は、経験主義者による帰納的認識ではなく、また反省哲学の語る反省的認識でもなく、反省が同時に経験でもあるような、『論理学研究』で呈示されている「実質的アプリアリ」にあたりと述べています。そして、この実質的アプリアリの現象学的分析が、超越論的感性論ないし超越論的論理学という標題で記述されている『受動的総合の分析』、『経験と判断』、『倫理学入門、1920/24』などに見られる「連合や触発」の志向分析として展開しているといえるのです。これに関連して、本質直観における受動的総合の積極的役割について、山口一郎『他者経験の現象学』、117頁及び次頁、1985年を参照。

²⁶ 同上、なお、フッサールの「超越論的事実性」に『フッサール全集第15巻』Nr. 22を参照。

学において、よく言われるような「一人称的説明と三人称的説明を統合すること」が問われているのではないことです。この指摘が示しているのは、「現象学運動の中で最も重要な発見の一つ」²⁷とされる、相互（間）主観性の解明をとおして、一人称的視点と三人称的視点そのものが、生活世界の中から生成してきているという現象学的洞察とそれらの視点が構成されるその仕方の志向分析による解明そのものなのです。ここで問われているのは、社会共同体における学際的研究の協働研究の実現であり、孤立する実存における実存的決断に向かう内省とか内観(introspection)なのではありません。

2) 「現在-時間意識」の分析

神経現象学の作業仮説は、「経験の構造の現象学的説明と認知科学におけるその対応物は、互いに補足しあう制限関係によって相互に関係している」²⁸と表現されます。この作業仮説が、神経現象学の一重要課題である「現在-時間意識」²⁹の解明においてどのように活用されているのか確認しつつ、今後の学際的哲学としての現象学の方向性を明確にしてみたいと思います。

① ヴァレラは、現在という時間意識を神経現象学の解明の課題とするさい、まずもって、フッサールの『内的時間意識の現象学』を中軸にしたフッサールの時間意識の分析やハイデガーとメルロ＝ポンティの「時間の自己触発」の議論を全面的に、「経験の構造の現象学的説明」として受け入れます。それというのも、「現象学的説明なしには、経験の直接的性質が消失してしまう」³⁰からです。脳科学研究による実在的連関の因果関係そのものの解明には、生命体の活動を動機づける「意味づけや価値づけ」の内実は与えられていません。ただし、現象学的説明を受け入れるとして、「過去把持と今と未来予持」による現在の時間構造の説明をどう理解するかということ、またその理解そのものが、フッサールのこのテーマに関する他の現象学的分析と照らし合わせる中で、初めて適切な理解となってくるということは、現象学的還元の4項目を探索しつづける現象学研究そのものの課題として自覚されなければなりません。この観点からみると、ヴァレラの過去把持及びその二重の志向性の理解には、幾多の誤解が含まれていること、また受動的綜合である連合の規則性が時間意識の分析に活用されていない点など、現象学研究そのもののさらなる展開が望まれるのです。他方、これはまさに現象学研究者にとっての主要な課題なのであり、むしろ、ハイデガーにしる、メルロ＝ポンティにしる、現象学の側の説明不足とされねばならないのです。

② 逆に、脳神経科学の提供しえる研究成果であって、現象学研究では解明できないのが、「時間的現出の神経ダイナミクス」そのものであり、ヴァレラによって、認知科学のアプローチにかわる、感覚・運動系のカップリングによる内部発生的ダイナミクスについて、身体化された力学的考察をとおして解明されています³¹。ここで呈示されている最も興味深い指摘は、「特定の神経アセンブリ〔組成〕がある種の時間的共振ないし「つなぎ」を通じて創発する」、詳しく述べれば「特定の神経アセンブリが、下位の閾をもつ競合する神経アセンブリに属する活性化されたニューロンの急速な過渡的位相固定を通じて選択される」³²という説明です。この神経アセンブリにおける競合と選択のプロセスは、およそ0.5秒(B.リベットの意識にかかる0.5秒を参照)を一単位として統合され、弛緩するプロセスとして説明されています。ヴァレラは、この神経アセンブリの競合と選択のプロセスがフッサールの「過去把持-今-未来予持」からなる生き生きした現在の意識にぴったり対応するとしています³³。この神経アセンブリのプロセスは、フッサールの印象と過去地平における空虚な形態と表象のあいだの連合による相互覚起(ヴァレラの相互作用interaction)に相応しており、神経アセンブリにおける共時的「カップリング」と相互覚起における連合の根本形式としての「対化」とが、同じ事象の神経学的解

²⁷ 同上、129頁。

²⁸ F. ヴァレラ、同上、133頁。

²⁹ F. ヴァレラ「現在-時間意識」(『現代思想』2001.vol.29-12)、170頁～198頁参照。

³⁰ F. ヴァレラ「神経現象学」(『現代思想』2001.vol.29-12)、133頁。

³¹ このことについて、F. ヴァレラ「現在-時間意識」(『現代思想』2001.vol.29-12)、174頁及び次頁を参照。

³² 同上、176頁。

³³ 詳細については、山口一郎『人を生かす倫理』、354頁～358頁、2011年を参照。

明と現象学的解明を意味しうることは、神経現象学の相補的協働研究の成果の一事例といえることができるでしょう。

③ ヴァレラの「現在-時間意識」の分析において、この「カップリング」は、神経アセンブリの同時的カップリングとしてだけでなく、生命体と周囲世界との相互作用が生命システムと周囲世界システムとのシステム間のカップリングとみなされています。そしてこのカップリングは、ヴァレラとの協働研究者であるN. デプラスの論文では、直接、フッサールの対化との相関関係として、「両者は、同じ四つの構成要素を含んでいる。すなわち、(1) 身体への投錨性、(2) 時間に基づく力動性、(3) 関係の意味、(4) 必然的に他者性を許容する連結の創造である」³⁴と述べられているのです。この4番目の「必然的に他者性を許容する」という論点は、ハイデガーの時間の自己触発のもつ「現存在の自我性による実存的決断に由来する本来的時間性における他者性の欠如」に対する原理的批判となっていると言えるでしょう。

④ こうして確定される神経現象学の探求領域としての「対化とカップリング」の協働研究は、脳神経科学との結びつきをとおして、広汎性発達障害に属する自閉症や精神障害の一つである統合失調症、またリハビリテーションやカウンセリング、スポーツ運動学や経営学等の学際的研究を推進しうる有力な方向性を示しているといえます。知覚系と運動系のカップリング(対化)は、自閉症研究の展開を、知覚系と運動系を結びつけているミラー・ニューロンの学習による形成の視点と³⁵、フッサールの発生的現象学における「原共感覚(無様式知覚)からの個別的感覚野の形成」³⁶という視点との協働研究として適確に方向づけることができるといえます。脳疾患後のリハビリテーションにあたって、患者とセラピストのあいだに生じるカップリングが治癒の過程の主要なテーマとなっています³⁷。スポーツ運動学において、「スポーツ運動学は現象学に基礎づけを持つ」として、無意識に生じる運動能力の形成を受動的総合の観点から解明しようとする試みがなされています³⁸。経営学では、その知識創造論において、M. ポラニーの「暗黙知」の理論、及び「場」の理論の基礎づけとしてフッサールの受動的総合と受動的相互主観性の観点が活用されているのです³⁹。

⑤ このように神経現象学を学際的哲学の一例として呈示することで明らかになるのは、ハイデガーの時間の自己触発にそくした本来的時間性への見解は、「身体、時間、関係の意味、他者の他者性」のいずれの論点においても、受動的総合である対化との合致を見いだせないのに対して、メルロ＝ポンティの「過去と現在の同時性としての肉」の思想は、この四つのいずれの論点においても、対化とカップリングの協働研究の方向性を支持し、推進するであろうと思われることです。存在論的差異とされる「存在と存在者」の峻別に、学際的哲学の展開の方向性はみいだせません。メルロ＝ポンティが存在の概念に接近したのは、「垂直的存在の再発見」であり、「過去と現在の同時性としての肉」であり、『人間の科学と現象学』にみられる「心理学的認識」という経験科学と現象学的分析を統合しうる学際的哲学の方向性に相応した試みであったはずで、その意味で、ヴァレラの神経現象学は、肉の概念の内実とその先構成の「如何に」を現象学的分析にもたらしうる明確な方法論を提示していると思われるのです。

³⁴ N. Depraz, The rainbow of emotions: at the crossroads of neurobiology and phenomenology, in: *Phenomenology and the Cognitive Sciences*, 2008. p. 239.

³⁵ 自閉証とミラー・ニューロンの機能との関係について、ラマチャンドラン、『自閉症の原因に迫る』日経サイエンス,2007年を参照。ミラー・ニューロンの発見について、ジャコモ・リゾラッティ他『ミラーニューロン』2009年を参照。またミラー・ニューロンと現象学の相互(間)主観性論との関係について、山ロー郎『感覚の記憶』第I部第一章を参照。

³⁶ この論点について、山ロー郎『感覚の記憶』第II部第二章を参照。

³⁷ リハビリにおける患者とセラピストとのあいだのカップリングについて、人見眞理『発達とは何か』第7章、2012年、及び河本英夫『臨床するオートポイエーシス』、「6リハビリテーション」の章、2010年を参照。

³⁸ 金子一秀『スポーツ運動学入門』の序章、2015年を参照。

³⁹ 野中郁次郎・遠山亮子・平田透『流れを経営する』第3章5、2010年を参照。